『國民新報』1939年6月25日

巻頭語　金飾りを除れ[[1]](#footnote-1)

も、はや三、二のなるがれた。

みれば、まことになるであり、の々のまことにのみであるのはいふまでもない。がのもまたなものでないとのにしてきたことにもんじていとふ。

ところが、をあげてのびがかにまつてきたのは、どうしたか、にをね、のにもをせよとのへにするならば、てもゆうはない、がはこのな三にしかみのではなかろうか、それだとすれば、まことにしむべきことである。

のをするものが、、そのので、どこもまことに々として、を三もけているとおもへぬとしている、と々は々きかされるが、これはしてわがが、からほめられたとにつてはならない。

そのほめのにはかそけきわらいのんでゐることをのがしてはならぬ。

もしそれがとふなら百をのをくするがよい。くのが、をつているは、まだすべしとしても、そのにのぴかぴかつているのはどうしたことか。

さんやさんがをしてまで、にをじようとする、このに、があつてにれないならのにでもれて、つて、おくがよい、がのにことごとくをてゝこの三のとなとひつゞけているではないか。

ただおばかりのではのにもなるものではない。百のがなくてはこのをつていけない、だけでも三をけなければならぬ、よろしくももも、いやしくも黄金色のしたものはすべて、これをかられ。

まことにのあるのだなどゝ、どこかののおにし、いゝにるのではない。

三がる、の一をれ、これにすのはない。

1. この文章は『國民新報』巻頭語欄に掲載された。単行本『同胞に寄す』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-1)